
東方洪水域

葬炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方洪水域

【Nコード】

N2543Y

【作者名】

葬炎

【あらすじ】

「あゝ、暇だ」と、ぶらぶらしていたら
「じゃあちよつとこつちにい」 「えっ」と呼ばれて気づいたら何も
ない空間だった。。。ようするにテンプレで東方の世界に逝
きます 「じゃねーよ！あんな世界じゃ3秒で死んじゃうわっ！！」
・・・がんばって ということ一般の高校生が東方にinn！

自己紹介及び主人公設定

どうもっ！葬炎です！

今回初めて小説を書き始めました。まだまだわからないことも多く、ぐたぐたな展開が多々あります。なので、こここの部分をこういうふうにしたらいよいよ！とか、このキャラはこういいうふうにして！などは言ってくれると嬉しいです！では主人公設定です！

名前：千夜

性別：男

年齢：17（不老不死になったため容姿が17で止まっている）

能力：水を司る程度の能力

容姿：普通よりちょっと上？でもやっぱりモブ

備考：前の世界ではどこまでも普通の学生だった。普通の家で普通に暮らし成績は下の中くらい（ようするにバカ）。ゲームや漫画の知識はちよつとはあるがオタクほどでは無い。将来の職業について悩んでいたが、東方の世界にきてしまったため関係無くなった。

ついでに神の設定

名前：吾輩は神である、名前はまだ無い（もう出番無し）。

年齢：んなもん数えてられっか！

性別：自由、精神は男

能力：東方風に言うと、創造と破壊を司る程度の能力

容姿：イケメン、1000人中1000人が振り返るくらい。 . . .
イケメン爆発しろ（ぼそっ）肉体の年齢は20くらい

備考：あらゆる平行世界を管理する神、でもある日あまりの仕事の量にぶち切れてそれぞれの世界に意識、いわゆる『世界意思』と呼ばれるものを創り自分で自分を管理するようにした。その結果暇になり今ではゲーム三昧。主人公が転生した理由は、やっとモンスター・ンターと呼ばれるゲームのミラ ルカンと呼ばれる（作者的に）最強のモンスターを初期装備で倒せたことに喜び、ちらっと世界を見たときたまたま目に入った主人公が「暇だ」と言っていたためその願いを叶えてやった。（ハイテンションなときだったので、まさにやっちゃった ミって感じ）

2011 11/7

全話編集

作者は削除されました

魔王（神）からは逃げられない！（前書き）

処女作です！

誤字脱字は教えてくださると嬉しいです。

駄文です。

魔王（神）からは逃げられない！

「あゝ、暇だゝ」

と、だれてるバカが一匹

「バカっていうなー！！」

だってバカじゃんw

「あーっもう！！」

暇な主人公はあまりにも暇なために友達が存在しない街を歩いていた。

「家に帰っても勉強しろって言われるだけだしなー、帰りたく無いなー」

”じゃあちよつとこつちにこい”

「えっ誰？どこだ（って何この光の玉は！元気　っぽいな！こつちくんは！！」・ダッ・

主人公は声の主を探していると光の玉が自分の方に向かってきたためとりあえず逃げ出した

”逃げんなっ！”

「無理っ！ちよつこつちくんになって！」

”はっはっはー！俺（神）から逃げられるとでも思ったかー！
！”、ブウン、

「えっ早くなっただし！逃げ切れな、うぼあー！！」

主人公は光の玉に飲み込まれた・・・

しゅじんこうはめのまえがまっしろになった！

「じいじは誰？私は何？」（前書き）

感想をもらえると泣いてよろこびます！

「ここは誰？私はどこ？」

ここは何も存在しない空間

「いったいなんだったんだあの玉は」

”ようやく気がついたか”

声の主をみると見慣れない人間がっ！

「あんた誰？」

”ふん、聞いて驚く「まあ誰でもいいけど、ここはどこ？」俺の話
を聞けっ！”

．．．だが主人公にはどうでもいいようだ

「じゃあ聞いてやんよ。」

”（なんで上から目線なんだ？）まあいい、俺は神だっ！！”

「あつそ」

”あれ？”

神は期待していた反応と違ってて混乱している

「で、俺はどうなの？」

” いやいやいや！反応薄いな！”

「だって信じて無いし、正直誰でもいいし」

” いや本当に神だからっ！”

「ふーん、で？俺はどうなの？」

何も無い空間より、いきなり現れた神（？）より自分がどうなるのが心配なようだ

”（もういいやorz）お前に転生をしてもらう”

「わかった〜」

”（・・・もう突っ込まんぞ）じゃあ逝ってこい！”

「パカッ、あゝ、穴があくとかありきたりすぎだろwちょっとはひねろーぜw」・ヒューン・

”・・・ちょっと調子がくるったな、まあもう会うことは無いだろう”

神と主人公の会話はこれにて終了。しかし神は再会フラグがたっているのに気づいていなかった！！

”あ・・・どこの世界か言っただねえや、まあなんとかなんだろう、じやあお詫びになんか適当に能力つけといてやるか”

・・・主人公はどうなのやら、それは誰にもわからない。

”．．．隣で「転生したいっ！」って叫んでたオタクならもっとい
い反応してくれるかな？”

ここは誰？私はどこ？（後書き）

そして作者にもわからないw

やはり上手く書けない、ランキング上位の作者さんはマジで尊敬します！

この神の再登場はもう無いと思います。

最後のはフラグではありません

気がつけば森の中(前書き)

駄文！そしてぐたぐたw

気がつけば森の中

ギャー・・・ギャー・・・

今主人公が居るのはそこそこ危険な森の中

「ZZZZZZ・・・ZZZZZZ・・・んー、よく寝た
ー！」

どうやら主人公は寝ていたようだ

「あれ？さっきまでいたうざいくらいのイケメンは？」

・・・神はイケメンだったらしい

「なんか話してたけど眠くてほとんど聞き流してたしなー」

神の話をスルーしてたのは寝たくて話をぱぱっと終わらそうとしたからみたいだ

「ふあゝ、ってどこどこよ？」

「なんか話をちゃんと聞いてたほうがよかったかな？でももつどうしようもないし、ペラッ、ん？紙？」

「これを読んでもということは無事だったようだな、今お前がいるのは東方Projectというゲームの昔の世界だ、

「はあっ！東方の世界かよ！そんな世界じゃ俺すぐピチユるじゃん

「!!」

主人公はあくまで一般人です

「だがすぐに死んでしまおうとつまら．．．もといかわいそうなため
お前に特典を与える」

「今つまらないって言おうとしたな？．．．まあいい、それならな
んとかなるかな？」

「1つ目はお前が死のうと思わないかぎり死なない不老不死」

「うあw最初からすごいのがでたなw」

「2つ目はお前に合う能力」

「おおっ！やっぱり東方といったら能力がないとやってらんないっ
しよー！」

「これは後で座禅をくむなりなんなりして確かめてくれ、俺が決め
たわけじゃないから弱くても俺のせいにするなよ」

「どういふことかというと、主人公が深層心理で、こうなりたい、と
願ったことを能力にしたそうだ。」

「マジかorzじゃあつかえない能力の可能性もあんのかよ」

「3つ目は妖怪化だな、種族は無くても特徴も一切無い」

「んだとゴルアツ！じゃあ人外になっただけで意味ねえじゃねえか

「！」

「だがお前は不老不死だからな、生きていればそれだけで強くなれるからたとえ能力が弱くても最強にはなれるだろ。」

「なま言ってますみませんでしたm(_ _)m」

「以上だな、身体能力は妖怪化の影響で全体的に上がっているから注意しろ。」

「ありがとうございます様っ！今までの無礼をお許し下さい！！！」

「なお、この手紙は読み終わったら爆発します。」

「え、チユドーン！あの駄神がつ！今度会ったらぶち殺す！！！」

「あの空間」

「（ブルツ）うおっ！いきなりなんだ！まあいい、もうやる」と終わったしまったモンンでもすっか”

「再び主人公」

「ん、せつかく別の世界に来たんだし名前を変えよっと、何がいっかな？」

「親に貰った名前を変えるとは、」

「ん、あっ！じゃあ千夜>せんやくな！」

「名前が決まったけどこれからどうなんだろう？」

ギヤー・・・ギヤー・・・

現在地：なんか危険そうな森

「・・・もしかして俺オワタ？」

気がつけば森の中（後書き）

中途半端

やせいのライオンがあらわれた！(前書き)

連投はしばらくしたらなくなります

「いやっ！はあっ！」

千夜はなにやら拳法らしき動きをしている

「・・・太極拳ってこうだっけ？」

・・・今まで何をしていたのか小一時間問い詰めたい、それに能力を確認するのになぜ太極拳？

「・・・さあ？」

↳さらにさらに1時間後↳

「ー飽きた」

千夜はあの後色々試してみたが、思うような結果が出なかったため飽き始めてきた

「まあそうそう他の妖怪に襲われることなんてがさっ「え”っ」

「グルルル」

「・・・！！（Bダツシユ）」

「ガオーッ！！」

「なんで日本？にライオンがいるんだよっ！」

日本です

「ちくしょー！なんで不幸なことばっか起きんだよ！」

ちなみに今千夜を襲っているライオン？は妖怪です

「うわー！とりあえずこのライオン（？）をどうにかしないとっ！！」

千夜の願いがつうじたのか、走っている先にそこそこ大きい川がある

「うおっ！ラッキー！もどきとはいえしょせん猫科っ！ならば水の中にはこないだろっ！！」

ーただし現実是非常だったー

「うおおおっ！ダイブ！！」

ーバツシャーンー

「ふう、これでだいじゅーバツシャーンーなにっ！？」

「グルルル」

「ギャー！まだ追ってくるー！」

「ガーーーー！！」

「うわっ！食われー！ピキーン、閃いたっ！」

”水を司る程度の能力”

「はあっ！！」

「ぎゃうっ！」

「はっはっはー！我が世の春がキターー！」

千夜は襲いかかってきたライオンもどきを水でポケ　ンのハイド
ポンプのように水をはきだして撃退した

「はっはっはー！．．．はあ、落ち着いた。とりあえずこのライ
オン？は食えるかな？」

と、千夜がライオンもどきに近寄ると

「ん〜あ、いたいた。ってうわあ．．．グロッ、しかもライオン
と微妙に違うし」

千夜はライオンもどきの顔を見ると普通のライオンと違うのがわか
ったようだ

「なんかこのライオン？たぶん妖怪かな？に目が三つあるし、角も
生えてるし」

「．．．さすがにこれは、ぐ〜．．．まあ大丈夫かな？い
ただきます！」「がぶっ、

千夜はあまりに腹が減っていたため生のまま食い始めた

「うえ．．．マズ、でも我慢しよ」

やせいのライオンがあらわれた！（後書き）

どうしたらいい小説が書けるんでしょうかねえ？

俺の旅はこれからだっ！(前書き)

やっと東方キャラとエンカウント

俺の旅はこれからだっ！

「は、あのライオンもどきがありえないくらいマズかった」

「ん、どうしよっかな？とりあえず危ないから森から出よう」

「川に流されて行けば下流につくだろ、そして人を探す」

あきらかにバカな発想をした千夜

「ん？なんか悪口を言われたような？」

気のせいだ

「気のせいか」

「よし！じゃあこのままGO！」

そんな感じで千夜は川に入ったまま流されていったとき

「まあ妖怪だし風邪とかにはならんだろ」

流されてしばらくすると

「は、快適 かい、ゴスンッ！、痛ってー！」

「ガスンッ！、ゴスン！、ガブッ！、

「ぐはっ！、はっ！、はっ！、うぎゃあー！」

千夜は期待どおりになったようで、頭に岩がぶつかって、そのまま次の横にあった岩にぶつかり、最後に魚に食われかけたようだ。襲いかかってきた大きい魚は水の圧力を使って潰した。ちなみにバカは下流の方に頭を向けて流れていました

「・・・川から出て普通に歩こ」

「は、前途多難だ、ぐきつ、痛てー！」

石に足の小指をぶつけてしまったようだ

「俺に救いは無いのかorz」

いつかむくわれる日がくると信じたい

「・・・とりあえず森を抜けよう」

（1時間後）

「うわ〜！！今度は狼かよっ！！」、ダダダダッ、

川沿いを歩いてたら水を飲んでた狼に遭遇

「ちくしょうっ！ならばまた水でっ！」

「ーしかしMPがたらなかったため水を操れなかったー」

「MPってなんだよっ！東方にその概念は存在しねえだろっ！」

「がっがっ！」「タタタタッ、トンッ！」

「えっ？」「ガブっ」うわっ！」

（また1時間後）

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．」

どうやらなんとか逃げ切れたようだ

「は、川から離れちゃったしどうしよっかな」

「は、かさっ」だれだっ！」

「そっいうあなたこそ誰？」

音がした方を見ると変な格好をした美人がいた

「俺？俺は「ビュン！」うおっ！危ねえな！なにすんだよっ！」

「誰でもいいわ。完全に人型の妖怪なんて初めて見たから、私の薬の実験台になって？」

「いや怖いよっ！どんな薬を投与する気だよっ！」

「え？う、ん、妖怪にどんな影響があるかの実験とか、後は妖怪にどんな攻撃が一番有効なのかとか．．．色々よ」

薬だけではなく人体（妖体？）実験をするつもりらしい

「絶対に嫌だっ!」・ダッ・

「あなたに拒否権なんて無いわよ?」・タッ・

「俺の人権はどこに行った!」

「あら?あなた妖怪じゃない」

「ですよねー!」

「それより逃げないでくれるかしら?」・ひゅんっ・

「・ビュオッ・うおっ!なんでそんなに初速と到着時の速度が違っ
んだよっ!」

「便利でしょ?この弓も発明品なのよ」・ひゅんひゅんひゅん!・!

「・ビュン・うおっ!・ビュン・はっ!・ビュン・こなくそっ!」

「中々粘るわね」・ひゅん・

「・ビュン・ほいっ!と、そんなにしつこいと何万年たってもお嫁
に行けないぞっ!」

「(ビキッ)・・・本気で殺るわ」・ドドドドドドドドドド!・!・!

「えっ?ちょ、音がもう弓じゃ(っ)ピチューン(」

「安心しなさい、捕獲用の弓だから死にはしないわ、本気で殺った
から死ぬ程痛いと思うけど」

俺の旅はこれからだっ！(後書き)

それじゃあまた次回ー

えっ？永琳？（前書き）

キャラ崩壊、どうしてこうなったw作者はヤンデレが好きなのでちよっとそっちに行きます

えっ？永琳？

・・・ウーン・・・ガシャーンガシャーン・・・ギュルルルル・・・

「んん、ここは？」

「あら？気がついちゃった？」

「お前は！」

「ええさっk」・・・誰？」・・・あら？脳をいじりすぎたかしら
「？」

「・・・ああっ！あの妖k「殺すわよ？」「しませんm」
「m」

「それよりここはどこなんだよっ！お前は何者なんだよっ！俺をど
うs「うるさいからまだ眠ってて」えっ、ドスッ、ま・・・またか」
「ガクッ」

「ん、次はどこをいじろうかしら」

「・・・。。。」

（3時間後）

「・・・！！！！ガバツ、はあ・・・はあ・・・あの変な格好の
美人に改造される夢を見た」

「あら？美人だなんて嬉しいこと言ってくれるじゃない。でも”変な”は余計なお世話だわ」

「．．．！出たなシヨツ　ー！！」

「誰が世界征服を企む国際的秘密組織よ」 b y w i k i

「．．．なんでお前が知ってたんだよ！」

「さあ？なんかこう言えって電波が届いたわ」

「どうやら永琳は電波少女．．．いや年齢的に電波ババ」なにかしら？」．．．いいえナンデモナイデス

「．．．で？結局俺の体に何したんだ？」

「そうね．．．簡単に言ってしまうえば妖怪の弱点を探したり、妖怪を完全に消滅させる方法を探したり、後あなたの体の構造が人間と同じなのが解ったからそれを利用して人体に対する薬の影響を調べたり．．．後は」

「いやいや！もういいから！」

「そう？それとあなたはこれから私の家に住んでもらうから」

「はあっ？なんでだよっ！」

「だって実験が終わって処分しようとしても死なないし、どうしようも無いんですもん．．．それと薬のいい実験台になりそうですね）　ぼそっ）」

どうやら永琳は千夜を（丈夫な実験台として）気に入ったようだ

「おいまでゴルア！！今最後の言葉聞こえたぞっ！絶対そっちがメインの理由だろ！！」

「メイン？私には言葉の意味が分からないわ」

「いや絶対分からなくとも理解してるだろっ！」

「それじゃ私の家に案内するわ」

「俺の話聞けや〜！」

「じつちよ」

「うが〜っ！っはあ〜もういいや、．．．今のうちに逃げ、ザザッ

．．．（冷や汗ダラダラ）」

なにが起こったかわからない人に説明しよう！今千夜が解剖室らしきところから永琳が出ていった扉が直接外に出たためそのまま逃げようとしたら、今から戦争に行きます！と言わんばかりの装備をした人？に囲まれたのであった

「そいつらは機械よ」

「いやそれでも怖いよ！」

「それであなたの名前は？」

「（スルー!?）・・・俺の名前は千夜だ」

「そう、私はXXXXXよ」

「はあ?えーと?」

しっかり聞き取れたはずなのに言葉として理解ができなかったことに混乱しているようだ

「・・・あなたの頭じゃ理解できないと思うから永琳、八意永琳でいいわ」

「俺がバカだつて言いたいのか!」

「・・・いいえ?ちがうけど、よく言われるのかしら?」

「・・・はっはっはー!そうだよな、さすがに初対面の人にバカつて言われるはざー!っておい!その生暖かい目をやめろっ!」

「・・・(ちょっとは優しくしてあげようかしら?)」

「ちくしょう・・・ぐすっ、俺だつてな・・・ぐすっ、俺だつてがんばってんだぞー!。(ノ、(。、うわーん!」

千夜はガラスのハートなようです

「・・・そう、がんばったのね」(微笑)

永琳はまるで聖母のような眼差しで千夜を見ている

「うあう・・・泣かされた相手に慰められた・・・orz」

「さ・・・家に行きましようか」

「なんか最初に比べてだいぶ優しくなったような気がする。ぐすん」

「（泣いてる顔・・・ちょっといいかも）」

「（ぶるっ）うおう！なんかとてつもなく変態・・・もとい大変な
ことになってる気が・・・」

「（じゅるり）」

「（ぶるぶる）？なんか本能が逃げると言ってる気がする」「気のせい
よ」「おおう？いきなりなんぞや？」

「あまり痛い実験とかはしないから安心してこっちにきなさい」

「（ビクッ！）？まあそれなら（なんか行ったら引き返せない気が）」

「（ニヤリ）ええ早くこっちにキテ？」

「？ああ（ガシッ）・・・あれ？八意さ「永琳でいいわ」・・・
じゃあ永琳さ「さんはいらない」・・・永琳？このがっしりと掴ん
でる手をどかしてくんない？痛いんだけど」

「・・・ふふふふ」

「．．．あれ？永琳？目が逝っちゃってるんだけど？めっちゃ怖いんだけど！」

「．．．ふう、安心して」

「（賢者モード！？）．．．なにに安心しろと？」

「これからあなたにどこに居てもわかるように発信機とか何してるかわかるように盗聴器とかほかにも色々と貴方を改造するだけだから」

「え！？ちよつ俺のプライバシーは!？」

「．．．ふふふ、これから私の家で色々しようねー」

「俺の貞操の危機！いや相手が美人だからむしろバッチコイ？．．．でもちよつば無理矢理はいやー!!」

「無理矢理はしないわ」

「え？ほんと？」

「ええ．．．まずは貴方を私がいけないと生きていけないようにして骨の髄まで私のことを記憶させてから自分から襲うような場面を作つてそれからそれから」

「怖ー！えつ東方の永琳ってこついうキャラだっけ!？」

「．．．ふふふふ夢が膨らむわぁ」

「それは夢じゃなくて妄想っていつんだよっ！え？いやまじで俺食われるの！？」

「さあ．．．一緒にどこまでも行きましょウ」

「いーいやーいー！」

それ以降千夜を見た人はいなかったと言う．．．

えっ？永琳？（後書き）

貞操は無事に守られるかっ！？・・・まあしばらくは童貞の予定で
す

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（前書き）

四千字を超えたぜ！

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！

――キングクリムゾン！同棲し始めてから何百年か後！――

「は〜、マジ疲れた」

これから一人称視点に挑戦してみるぜ！

〜ということ千夜視点〜

は〜、ん？初めての人は初めまして、主人公の千夜だ。突然だが俺の愚痴を聞いてくれ。あれは36万年前だったか、いや1万6千年前だったか、え？ネタはいらなくて？残念だな、エ シヤダイは好きなのに。まあいい、それよりも永琳と同棲しはじめたころは自分を守るのに必死（誤字にあらす）だったよ。そう．．．あれはあのころに起きた事件？だった．．．

〜永琳と同棲を始めて次の日〜

「せ〜んやつ」・ガバツ、

「・ポスン・うおっ！いきなりどうした永琳？というか最初と比べてキャラ変わりすぎじゃね？」

永琳は抱きつくのが好きなようなんだが、正直に言うと胸が背中に当たって理性が大ピンチだからやめてほしいんだが

「え〜、別にいやじゃないでしょ〜」

「・・・いやもはやお前誰だよ」

「それとも・・・嫌？（ウルウル）」

「嫌な訳があるはずが無いー」

「（ニヤリ）じゃあいいでしょー」

「ーはめられた！」

感想：女は怖い

「・・・ふう、そろそろふざけてないで家でヤルことを教えるわよ？」

「・・・今ヤルの発音が怪しかったんだが？」

具体的には犯るほうで・・・

「気のせいじゃない？」

「（は〜）で？実験台以外になにかあるのか？」

はて？俺はてつきり薬漬けにされて最終的にホルマリンに入れられるんじゃないかと思っていたんだが

「や〜ね〜、（今の）私がそんな（もったいない）ことするわけ無いじゃない」

「今いやな副音声が聞こえたんだが!？」

「気のせい気のせい 英語でいったらウツドスピリッツよ？」

「．．．絶対お前永琳に憑依した現代人だろ」

「じゃなきゃ今までの反応がおかしいだろ」

「違います」

「はっ、今久しぶりに神の声が聞こえた気がした！」

「．．．頭大丈夫？」

「やめろっ！俺をそんなに痛い子を見るような目で見るな！」

「私とお医者さんごっこをしましょうね」

「なんか惹かれるものがあるが遠慮をつ！？なんで剥いてるんだよ
！」

「気付いたら上半身が半裸になってたぜ！」

「はあ．．．はあ．．．！」

「怖い怖い目が血走ってるんだけどっ！ちょっと離れろっ！」

「永琳が顔を赤くしながら目を血走らせて迫ってくるとか、キャラ崩壊が激しいぜ！」

「はっい 脱ぎ脱ぎしましょうね」

「17歳の俺からしたら拷問以外のなにものでもないっ！そしてい
いかげんやめろ！」・ブンツ・

「ゴスンツ・きゃうっ！なにすんのよっ！まあ落ち着いたわ。．．
．いいところだったのに（ぼそっ）」

油断すると知らない内に大人になってそうだな．．．

「．．．はあ、で？俺はなにをすればいいんだ？」

話がずれてるからな、立て直さないと

「そうね．．．あなたは料理とかはできるかしら？」

「？こんなに技術が発達してるんなら自動で料理する機械とかは無
いのか？というか自分で料理しないのか？」

言い忘れてたが、今居る場所は永琳が都市（現代から見ても明らか
にオーバーテクノロジーな都市、どれくらいかというトド えもん
が生産されてそうな）と言っていたところの中心部辺りにあるあき
らかにほかの家とは雰囲気の違いの中で、簡単に言ってしまうば
周りの家は皆典型的な近未来な家なのに対して、この家は武家屋敷
のような物である。．．．永琳の自宅らしい。

「当然あるわよ？でもやつぱり人．．．貴方は妖怪だからわからな
いかもしれないけど、人が作った物は美味い下手関係なく嬉しい物
よ？後、私が作るのはちよっと．．．」

ん？言葉を濁したな

「なんでだ？」

「~~~~／／／！料理が下手なのよっ！！！」

「うおっ！そんな叫ばなくとも・・・」

以外だな、永琳は全てに置いて天才だと思ってたんだが

・まったく、デリカシーつてもんが無いな・

「・・・で？俺はある程度は作れるが、そんなに美味しく無いぞ？あくまで一般家庭の味だからな。」

「・・・それでいい。いや、それがいいのよ！」

「・・・聞かないで置く、それでいいならいくらでも作ってやるっ
作るの嫌いじゃないからな

「本当！？ありがと〜！！」「バツ・

「うわっ！・ギョッ・いきなり飛び付いてくんなって！」

「はっ！！・・・あうっう〜／／／」

永琳の顔が恥ずかしさで赤くなってるな

「（えっなにこのかわいい生物、持ち帰りはおkですか？）」

「うっうっうっ！(ボンッ)／／きゅ〜」

「あ、気絶しちゃった。．．．なんで今まで平気で抱きついてたのに今回は駄目だったんだろ？」

「／／きゅ〜」

「．．．まあ起きたら聞けばいつか。」

〜何時間か後〜

「／／うっ、恥ずかしいところを見せちゃったわね」

「ああそのことなんだが、なんでいままで平気で抱きついてきたのに今回は駄目だったんだ？」

「／／それは．．．あの．．．その．．．笑は無いで聞いてくれる？」

「(ぐおっ！美人の上目遣いはヤバイな！)．．．なんだ？」

「えと．．．正面から抱きしめたら顔が近くて、そしたら急に恥ずかしくなっちゃって／／／」

永琳は予想以上に初心^{ウッ}だった

「(ぐはっ！やめてっ！もう理性のLPは0よっ！)．．．そういえば毎回後ろから抱きついてたな」

そうなのだ、永琳と出会って一日しか経っていないのに抱きつかれ

た回数は10を超えていて、全て不意打ちぎみに後ろからされていたのだ。

「えっと、これからもよろしくね？／＼／」・ニコッ・

「．．．．．ぐはっ！（吐血）」

「きゃー！どうしたの千夜！もしかして昨日の実験のせい!？」

「．．．永琳が可愛いすぎて生きるのが辛い」・バタッ・

美人＋上目遣い＋満面の笑顔＋恥ずかしさが残ってる赤い顔＝最強

「そんな、可愛いだなんて／＼／．．．はっ！それより千夜をベッドに運ばないとっ!」

・そして千夜は次の日まで目覚めなかったとさ。．．．リア充爆発しろ（ぼそっ）・

く時は今!く

な？なかなか危ない事件だったろ？ほかに小っちゃい事件が沢山あったな。例えば風呂に入ってる途中に永琳が入ってきたり（確信犯）「普通逆だろっ!」って言ったなら「じゃあ私が風呂に入ってたら．．．覗いてくれる?／＼／」って感じてあえなく撃沈（鼻血で）したぜ！ほかにはこんなこともあったなー！ー！ー！

く何年前く

「お〜い永琳！飯ができたぞ〜!」

「はい」

「よしっ！じゃあ食つかー！」

「いただきますー！」

「むぐむぐ、あいかわらず普通の飯だな」

「あむあむ……ええ、でも徐々に美味しくなってきたわね
ギリギリギリー」

「……すごい悔しそうだな」

「女としてはちょっとと思うことがあるの……」

そうなのか？男な俺には分からないんだぜ

「そんな小つちゃいこと気にすんなって」

「貴方からしたら小つちゃくても私からしたら大きいことなのよ！」

「ん、じゃあ俺が料理教えてやろうか？」

どうせ家から出れないから暇なんだよな、やることといたらネット、料理、ゲームだからな。（他の家事は機械がやってくれてる）

「本当！？」「キラキラー」

「めっちゃ楽しみにしてる……あ……ああ」

「やった！これで料理が美味しくなったら千夜にあくん（はあと）
つてしてみたりほかにも／＼」

「ん？．．．あれ？おーいえーりん．．．駄目だこりゃ。トリッ
プしてるし戻ってくるまでゲーム（DS）でもやってっか」

ちなみにカセットはポケ　ンの白だ

くトリップ回復に3時間、そのあと羞恥心で部屋の端っこに2時間
の計5時間後く

「よしっ！時間もいい感じだし夕食の下準備を始めようか！」

「／＼／うう．．．まだちよつと恥ずかしいわ」

「（無視）それじゃあ調理始めよー」

相手してたら時間が無くなっちまう

「はい」

く千夜のお料理教室！会話のみく

・言葉の意味を理解しよう

「よしっ！じゃあまずキャベツを千切りにして．．．って永琳なに
してんのー！」

「え？だって千に切るんでしょっ？」

「そのメジャーらしきものは仕舞いなさいっ！よつするに細く切れ
ってことだよっ！」

「・・・ごうかしらっ？」

「いやいや細すぎだっ！これもはや繊維じゃん！どっしたらごう
いうぶうに切れんだよ！」

「・・・料理って難しいわね」

「それほどか!?!」

・自分オリジナルの味は慣れてから

「じゃあ次はここに味噌を入れて・・・」

「・・・」

「そこで次はさいの目に切った豆腐をいれます」

「(そ〜)」

「!」

「(ビクッ)」

「今なにを入れようとしたのかな?かな?」

「その・・・ねえ?」

「ん？言ってみな？」

「えっと、ここで砂糖（甘み）を入れたら美味しいかな？」と

「なんでだよ！今作ってんの味噌汁だよ！？」

まあこんな感じだね、まさかここまで料理がだめとは思わなかったよ。これが天才とバカは紙一重ってやつなのかな？

「料理って難しいわ」

「・・・永琳が発明してる物よりは圧倒的に簡単だと思うよ？」

「そして時は刻みだす！」

まあそれから永琳は今までずっと練習を続けていてね、今ではたまにある失敗作を抜けば普通に美味しいってレベルにはなったよ。後は当然能力の練習もしたよ

「つい最近」

「ほっと！」

「うわー！すごいすごい！」「ワーワー！」キヤーキヤー！

ん？今なにしてるかって？それはだな、プール一杯分くらいの水を空中に浮かべてな、空飛ぶプールって作ってみた！

「いや、本当に最初のころに比べて能力が使いこなせるようになって

てきたな」

「本当にね〜。はあ、快適だわ〜」・ザブザブ・

ちなみに今は夏でな、この空飛ぶプールは子供に人気なんだ！一日百円でね、落下防止用のネットがあるとここで空飛ぶプールを運営してる。あ！ちよつと前から街に行ったりしてるぜ！以外と人気者なんだ！まあ商店街とかでよく手伝いとかしてるからな、皆妖怪な俺を受け入れてくれたよ。まあ最初は近づいたら逃げられたけどな（遠い目）

「よつし！ここまできたらあの技使えるかな？でもさすがに都市で使うわけにもいかんしな〜」

前からやってみたかった技なんだが無駄に範囲が広くて特訓室じゃあ狭いしな、さすがに都市の外に出る許可は無理だったよ

・後々使う機会があるよ・

「うおつ！なんか嫌な予感がするんだが・・・まあそんな時はそんな時だな！」

「千夜〜？そろそろ帰るわよ〜？」

おっと、どうやら永琳は俺が考えてる間に帰り支度を終わらせていたようだ

「おつし！家に帰って夕食を作つか！」

まあこんな生活も悪くないか

「だがそんな平穩はすぐに壊れることとなってしまった。」

「？今フラグが立ったような気がする。」

「過程」は消し飛び「結果」だけが残る！（後書き）

どれくらいの話の長さがいいんでしょうかね？

戦争開始！・・・のちよつと前（前書き）

また短くなってしまいました、すみませんm（）（）mなるべく
五千字前後にしたいですね

戦争開始！・・・のちよつと前

「ハア・・・ハア・・・ハア！」

いきなりだが俺は今全力で走っている、なぜかって？それはな・・・

「トイレはどこだっ！」

—————

ふうふう、ん？ああこんな始まりかたで悪かったね、でももう我慢の限界だったんだ。ついでに言うとな今は都市が妖怪に襲撃されていとこなんだ。えっ？その割にはやけに落ち着いてるなだっ？・・・ああ、もう俺以外に都市には誰も居ないからな、焦る必要がないんだよ

「第一防衛ライン、突破サレマシタ。都市ニイル住民ハタダチニ避難シテ下サイ」・ウー！ウー！ウー！

「おお以外と早かったな、永琳に言っというて正解だったぜ」

何を言っただって？それはだな・・・

く回想く

ーただ今食事中ー

「そついえば、後何日かしたら大規模な妖怪の襲撃があるそつよ。予言の能力者が言っただわ」

「ぶほっ！いきなりだな！．．．そうか、都市は大丈夫なのか？」

予言の能力者というのは「夢で未来を見る程度の能力」という、簡単に言ってしまうえば正夢を見る能力なんだがやっぱり夢なため見たことが曖昧でね、いまいち使いにくい能力らしい（本人談）

「それが．．．わからないそうよ」

「そうか．．．」

ならば今しか無いな．．．

「まあ都市の防衛は完璧だから大丈夫でしょう」

「．．．いや、今こそ月に行くべきだな」

「．．．なんでよ！まだ、まだ大丈夫なはずだわ！」

永琳が焦ってる理由は穢れがどーのこーので俺は月に行け無いからな、実はと言うともう月に行くシャトルはできている。永琳がなんとか出発を遅くしてなければすでに別れ離れになっていたはずなんだ。月に行く理由はな、穢れを無くして不老不死になるためとか妖怪の脅威から逃れるためとか色々言われてるがどれが本当の理由なのかはわからない

「．．．永琳、今回はもう危険だつてわかってるだろ？」

そう、襲撃はこれで初めてでは無い。すでに何回かしていて、回数が増えるごとに妖怪の恐怖から新しい妖怪が生まれ、さらに人間が

地球から脱出しようとしているのがわかっていているのか日本中から妖怪が集まってきている。恐らく今回の襲撃は耐えられ無いだろう

「．．．それでも！」

「ポン、永琳、少し落ち着くんだ」

「．．．そうね、落ち着いたわ」

まさか永琳がここまで俺のことを思っていてくれるとは思わなかったよ

「．．．俺は絶対に死なない不老不死だってわかってるだろ？なら永琳が生きてればまた会えるさ」

「．．．絶対よ」

「ああ．．．」

ちなみに転生者だということは言っていない、べつ別に忘れてた訳じゃ無いんだからねっ！．．．うえ、気持ち悪

「．．．いまさら俺は転生者だ！っていってもな（ぼそっ）」

「ん？なんか言ったかしら？」

「いや、なんでも無い」

「そっ？？」

さてと、あれ（・・・）の準備をしないとな

「さて、せつかくの大イベントなんだからど派手にいこうか」

「・・・あれをやるつもりね；（妖怪が可哀そうになってきたわ）」

ふふふふふ、こんな事もあるつかと、あるつかと！今まで色々や
ってきたのだ！

「やっとあれが解禁になる時がきたか・・・！」

「・・・正直普通に戦っても勝てると思うわよ」

「それではつまらないだろう！俺はつまらないのが大っ嫌いなんだ
！」

「・・・なんだかんだ言っただけあなたも妖怪なのね」

まあな、長い生に退屈は毒なんだよ

「（・・・はあ、私はあなたと居るだけで満足なのに）」

・裏話だが、別に千夜が月に行ってもなんの問題も無い。だが、千
夜（妖怪）が人気者なのが気に入らない人間や、千夜が妖怪だとい
うだけで気に入らない人間が結託して、適当に理由をつけて地球に
残そうとしている。ちなみに永琳はこのことを知っているが、そう
いう人間は上にも居るためどうしようもなかった。

「やっぱり私も地上に残ろうかしら？」

「それはやめてくれ、俺が恨まれる」

ただでさえ妖怪が都市にいることでお偉いさんに睨まれてるのに

「・・・そうね、再会するのを楽しみにしてるわ」

「おう、そうしていてくれ」

「ええ・・・じゃあシャトルの最終整備に行ってくるわ」

「ああ、行っていい」

「ボタン・・・行ったか、じゃあ俺も妖怪襲撃のための準備をしようかね」

「ギイ、あまりやりすぎちゃ駄目よ？、ボタン、」

・・・俺そんなに信用無いかな？

「・・・まあいつか」

よしっ！じゃああれを出してっつと、ふひひひひ

「（・・・すごい心配だわ）」

戦争開始！・・・のちよつと前（後書き）

次回戦争、千夜が準備したものは！・・・どうしよう？そんなに期待しないで下さい

戦争の始まりだ！（前書き）

俺前に五千字超えたいって言ってたよな？すまんありや無理だった。今回も四千字くらいです。今後もこれくらいの一話の長さになると思います。

「それっ！」、ズパッ、

今使っているのはまんまアカッターだな、違う所と言えば圧縮されてる量がだんちなのと、水は使い捨てじゃ無くして循環している（ノコギリのような物です）のと、さらに操れると言うことだ！

「ガオオオー！」

「おお、俺の弾幕をかくぐるとはやるな！」

弾幕の構成：水爆弾（一定の距離を進むと複数の弾に分裂する）水の銃（速度がヤバイ上に一定の距離を進むと大きくなる。連射性が高い）水の剣（不規則に動きながら追尾してくる、軌跡は消えない上に無限に伸びる、そして複数）水レーザー（速度が（ryただし真っ直ぐ、そして長い）この弾幕が視界を埋める量でくる。結果――

「グオオオオー……」

「あらら、せつかくここまでこれたのにねえ」

「――これなんて無理ゲ？ by 妖怪の皆さん

「ちえ〜、もうちょっと踏ん張ってくんないかな〜」

視界を埋めるほどの死体死体死体死体――

「おっ？」

「ーその中で無傷で立っている妖怪がいた

「．．．ちっ、あんだけ居た俺たちがこんな短時間で全滅するとはな」

「そういうお前は、容姿から考えると鬼．．．なのか？」

「ああ．．．」

角を生やし筋肉がムキムキで下は腰衰だけのー

「ー変態だ！」

「ちがうわっ！」

「ーそう、容姿がほとんど人間の男と変わらないためただの変態にしか見えない

「ん？お前よく見てみるとー」

「．．．なんだ？」（警戒中）

「ーいい男だな」

「．．．！（明日への逃走）」「ダッ」

ガチムチに好かれたくねえよっ！

「おい！なんで逃げ出す！」「ダッ」

「俺にそっちの趣味は無い！」

「そっち……？ああ！ちげえよ！戦闘相手にちようどいいって意味だよっ！」

「そっやって俺が油断したところで後ろからズプリと……」

「だからしねえって！」

「それから似たような言い争いを一時間ほど」

「「はあ……はあ……」」

「……わかった、理解しよう」

「ようやくか、なんか無駄に疲れちゃったぜ」

「それより戦闘を始めようか」

「ああ！楽しみだ！」

「それじゃあ、都市最強の妖怪千夜！押して参る！」

都市には妖怪が俺しか居無いからな、間違えでは無い

「じゃあ俺も、鬼神の剛鬼くごつきく！全てを破壊しようか！」

おお！そのセリフかつこいいな！俺もなんか考えとこ

「「いざ……勝負！」」

――

「はああああ！」・ガキンツ！ガキンツ！

「ウオオオオ！」・ブンツ！ドシン！

ちくしょう！なんで当たってるのに水の剣も銃も効かないんだよ！
ついでに剛鬼の攻撃は当たるとやばそうだからがんばって全部避けてる

「ハアツ！」・ヒュン！

「フンツ！」・パシツ！

な！？表面は高速で水が流れてるから触れただけで切れるはずだぞ！

「ソラツ！」・バキン！

「うおつと！」・パシヤツ！

「・・・水か、壊しても再生するし厄介だな」

ちよっ！こんだけ圧縮した水（だいたい水の剣一本で一つの町を沈めることができる）を握り潰すとかどんだけ力が強いんだよ！

「ん？斬れないことに驚いてるな」

「・・・ああ、なんかの能力か？」

「そつだ。なんなら教えてやるつか？」

「本当か！？」

「鬼は嘘をつかん」

「．．．そんだけ自分の能力に自信があるってことか」

「．．．教えてくれ」

「おう、俺の能力は”干渉を否定する程度の能力”だ」

「．．．なんだそれ、チートじゃねえか」

「まあ自分への干渉しか否定できないがな」

それでも攻撃が効かないってことだろ．．．

「勝てる訳が無い！」

「あーっはっはっは！なにもこの能力は無敵って訳じゃ無いんだ、当然抜け穴もあるんだからがんばって探すんだな！」

そんなこと言っただって俺はそんなに戦闘のセンス？って言えばいいのかな？があるわけじゃ無いんだから戦闘しながら弱点を理解するなんてできるわけが無いだろ！

「考えるんじゃ無い、感じるんだ！」

「無理！俺は感じるより考えるタイプだ！」

・そしてバカなため考えて空振りすることがほとんど・

「（タイプ？）お前と会ってまだ間もないが、絶対そんな性格では無いと断言しよう」

「なぜだー！」

おかしい、俺は友達に「お前ってたまにすごい（バカな）発想するよな〜」って褒められたことがあんだぞ！・・・あれ？褒められたんだよな？

「それよりお前の能力は？」

「・・・」水を司る程度の能力”だ」

「ほお、お前の能力も凄い能力じゃないか」

「・・・そうか？」

確かに水を操れる（・・・）のは凄いと思うが

「・・・さてはお前、自分の能力を全部理解して無いな？」

「いやそんなはずは無いんだが・・・」

「（やっぱり理解してないな）・・・このままじゃつまらんから少しだけヒントをやるっ」

「・・・」

「お前の能力は”水を操る程度の能力”では無く”水を司る程度の能力”なんだぞ？」

「・・・つまりは？」

「（やっぱりバカだなこいつ）・・・水に関係することはなんでもできるんだ、そして全て生物にはとある水が流れている。これは妖怪も例外では無い」

「・・・！血か！」

よしっ！それじゃあさっそく・・・

「・・・そうなんだがな、それじゃあ俺は倒せんぞ？」

「・・・ああ！お前の能力を忘れてた！このチートめ！」

まあいい、俺は死なないんだから弱点がわかるまで納豆のごとく粘ってやる！

「（ぶるり）・・・今果てしなくめんどくさいことになった気がする」

「俺が諦めるまで殺し合いに付き合ってもらっぜ！」

「おおっ！どちらかが死ぬまで楽しもつか！」

そんなこと言ったら俺は絶対に負けないぜ？

「不眠不休の戦闘が一ヶ月ほど」

「ウオオオオー！」

「まだ殺し合いは続いていた」

「はあ．．．はあ．．．、殺しても死なないとか勝てるわけねえだろ！」

「はあ．．．はあ．．．ちくしょう、まだ弱点がわかんねえ！」

そろそろ戦闘を終わらしたいんだがな、どうしたらあの能力を突破できるんだ？

「ウオオオオー！やけくそじゃい！」・ブンッブンッ！．．．ドドドドド！．．．ドカーンドカーン！

水を大量につかって一斉^{フルバースト}発射だ！

「．．．！ちいっ！」・ダッ！．．．スタン！

．．．避けた、だと？

「．．．ばれたか」

「．．．もしかして一つの干渉しか否定できないってことか？」

つまりは、水の剣を使っていた時は斬るといふ干渉だけを否定して、水の銃を使っていたときは貫通することだけを否定していたってことか？

「ああ、そういうことだ。致命傷は回避できるんだが、衝撃とかは否定できないから地味に傷を負っているんだよ」

おお、よく見てみれば結構ダメージ与えてるな

「てゆうか、それだけを気付くのにどれだけ時間がかかってるんだよ！」

「しょうがないじゃ無いか！」

一人が相手だったから剣と銃は別々に使ってたんだよ！爆弾は性質上水を回収できないし水の消費が激しいからあんまり使わなかったし

「・・・はあ、鬼である俺があまりのめんどくささに心が折れそうだったぜ。何回弱点を自分から教えそうになったことやら」

・・・ようするに、あまりのめんどくささに自殺しそうになったと？

「諦めるなよ！諦めるなお前！！どうしてそこでやめるんだそこで！！もう少し頑張ってみろよ！！」by 熱血なテニスプレイヤー

「途中で諦めそうになったお前が言っな！」

ちっ、ネタが通じない奴め！

・忘れないように言いますが、今は遙かに昔です。ネタに反応できた永琳がおかしいだけです・

「はあ、負け決定か」

「・・・そういえば、なんで負けるのがわかってて逃げなかったんだ？」

「鬼は戦闘を至上とする妖怪だからな、例え負けるとわかってても逃げるなんて論外だ！」・ドンツ！・

うおっ！あまりの信念の強さに剛鬼の体から・ドンツ！・って聞こえたような気がするぜ！

「・・・じゃあ止めをさせてもらっぜ」

「ああ！来い！」

「これが俺の・・・全力全壊！」・ズドン！・・・ズパパパ！・・・ガガガガ！・

剛鬼に能力について教えてもらったからな、できるかな？って思っ
て空気中の水分を使って大量の水を召喚しようと思っただけだぜ！

「ぐはっ！色々教えてやったのに躊躇いも容赦も無いな・・・」
ガクツ・

「悲しいけどこれ、戦争なのよね」

色々と教えてくれた剛鬼に敬礼！（、ー、（）ゞービシツ・

「さてと・・・しっかり後始末をしないとな」

剛鬼と戦った後で疲れてるんだけどな・・・

「感慨深いが、この都市が残っていると厄介だからな、消させてもらっぜ！」

残っている力を振り絞って能力全開！

「ウオオオオオオオー！！」・ドッカーン！！

く、もう力も妖力も残って無いぜ、ちょっと眠るか・・・な・・・

・そしてこの日から千夜を見た者は居無いという・

「まだ・・・死んでねえよ！」・ガクツ・

・・・・どうやら今の叫びで正真正銘力尽きたようだ・

戦争の始まりだ！（後書き）

やっと一段落したぜ！次からは日本を放浪すると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2543y/>

東方洪水域

2011年11月10日02時17分発行